

ディキンソンの手紙(3) : 身内と友人たちへの手紙

原口, 遼

<https://doi.org/10.15017/1182>

出版情報 : 文學研究. 99, pp.45-84, 2002-03-30. 九州大学大学院人文科学研究院
バージョン :
権利関係 :

ディキンソンの手紙(3)

身内と友人たちへの手紙

原 口 遼

私は毎日綺麗になっていく。17歳の頃には、アマーストンの美女になって、男たちを傳かしていることでしょう。(アバイア・ルートへの手紙 1845. 5. 7. 14歳)

昨夕、エモンズさんと馬車で遠出をしました。(兄への手紙 1853. 6. 9. 22歳)

目 次

1. 少女時代の手紙の意味……………46頁
2. 学校友達の Abiah Root への手紙
 - L6. 1845. 5. 7 私は17歳の頃にはアマーストンの美女になっているでしょう。……………48頁
 - L10. 1846. 1.31 私はキリスト教徒になることを先延ばしにして来ました。……………51頁
 - L18. 1847.11. 6 私は今実際にマウント・ホリオーク女学院に来ていて ……56頁
 - L20. 1848. 1.17 シリマンの化学とカトラーの生理学を勉強しています。…60頁
 - L39. 1850. 後半 ああ私は危険が好きなのよ。……………62頁
3. 兄の Austin Dickinson への手紙
 - L19. 1847.12.11 昨夕ユークリッド幾何学の試験を終えて、どれも解けました。……………64頁
 - L52. 1851. 9.23 田舎の家で両親と暮らすのと、都会の煤煙と塵埃の中で兄さんと暮らすのとどちらがいいのかしら。……………66頁
 - L67. 1851.12.31 兄さんが病気をしてるのではないかと心配している ……67頁
 - L72. 1852. 2. 6 鉄道計画の一大決定があって近在ではみんなが大喜びしています。……………68頁
 - L123. 1853. 5.16 ドワイト牧師さんの説教には魅了されました。 ……70頁
 - L126. 1853. 6. 9 昨夕、エモンズさんと馬車で遠出をしました。 ……71頁

ディキンソンの手紙(3) 身内と友人たちへの手紙

- L127. 1853. 6.13 お父さんは古代ローマの凱旋将軍のように町中を行進して……………73頁
- 4. 従姉妹の Francis と Louise Norcross への手紙**
- L245. 1861.12.31 アダムズさんの奥様に、息子さんが亡くなったという知らせが来ました……………75頁
- L255. 1862. 3月後半 あの方はクラーク教授の脇で倒れ（中略）「おお神様！」と呟いて息絶えました。……………77頁
- L414. 1874. 夏 馬車の準備をしているうちにお父様死去の知らせが届きました。……………78頁
- L610. 1879. 7月初 当地で火事があったこと知っていますか。……………80頁
- L785. 1882.11月末 お母さんの死顔はとても美しかったです。……………81頁
- L1046. 1886. 5 召されて行きます。……………83頁
- 5. Selected Bibliography……………83頁**

1. 少女時代の手紙の意味

一口に「隠遁の詩人」と括られ、後半生は白いドレスを着て、人に会うことを嫌い、父親の屋敷から外に出ることのなかったといわれるエミリ・ディキンソンは、少女時代にどのような生活を送り、どのような感受性を持っていたのであろうか。

少女時代、ディキンソンは自宅から徒歩で5分のところにあるアマースト・アカデミー（小・中学校）に通ったが、父がアマーストの町とアマースト大学の有力者であり、そしてアマースト・アカデミーそのものの経営者の一人でもあった関係上、エミリはある意味で特別扱いであり、また一生懸命で素直で、教師たちからも友達からも愛される人気者として、屈託のない生活をしていたようである。

16歳になりアカデミーを卒業すると、初めて親元を離れて、アマーストの南西30キロの山間の地にある Mount Holyoke Female Seminary での寮生活を開始することになる。この女子学院では、各地から来た大勢の見知らぬ者たちと一緒に起居することになり（生徒総数300人）、不安と期待の中にも、当初こそ集団生活に馴染もうとしたが、起床から食事、教科、運動、礼拝、就寝時刻に至るまで、全員が一斉に行動する生活、年頃の見知らぬ女性

たちとの一種の競争社会、専門科目についての得手不得手の発見（特に代数は相当に不得手だったようで、黒板の前に立っての発表のとき、解答できずユーモアで誤魔化したというエピソードがある。）、それに、急速に成長し、自我に目覚めていく中での、頑なな自己の発見ということが起こる。そして、次第に学校側の方針、特にキリスト教の押しつけに違和感を覚え出し、ついには、公の場で反抗する（つまり半ば強制された信仰の告白をしない）という事件を引き起こす。

また、ディキンソンは（現在、旧ディキンソン邸の二階に展示されている白衣のドレスを見れば驚くが）、かなり小柄で、生来病弱で、よく風邪を引き熱を出していた。そのような状態でこれ以上集団生活を継続することが娘の健康のためにもよくないことを悟った父親は、翌（1849年）9月から、マウント・ホリヨーク女子学院の2年次の集団生活に戻ることを差し止めた。つまり、ディキンソンの正規の学校生活は18歳時で終了したのである。

であるから、少女時代のディキンソンの手紙には、ディキンソンはなぜ快活で屈託のない少女から偏屈で気むずかしく、思想的に主張のある存在に変貌していったのか、つまりはなぜディキンソンは詩人になったのかという、ディキンソンの変貌の謎を解く大きな鍵があると考えられる。

また、それらの手紙には、エミリの学校生活と身の回りに起こったことが、微細に報告されていることから、19世紀中葉における当時のニューイングランド地方の教育制度、教科課程、教科書、教員たちの教育への取り組み、地域の人たちの文化生活やレクリエーション活動、教会と信者たちとの関係、当時のリヴァイヴァル運動などの実態などが分かり、文化史的にみても興味深い。

またディキンソンの少女時代には、アマースト大学を卒業後、ハーバード・ロースクールへの入学準備のため、家を離れてボストンで一時代用教員をしていた頃（またロースクール在学時代の頃）の兄オースティンに、家族のことをあれこれと伝えた手紙があり、それらはエミリの兄を慕う気持ち、

家族思い、家庭 (home) というものへの独特の偏愛を示していて興味深い。

またエミリの母の妹である Emily Norcross の娘たち Francis と Loo Norcross の二人の従妹たちへの手紙が、家族と町で起こった事件を伝えるものとして興味深いので、併せて訳出する。

さらに身内への手紙としては、将来、兄オースティンの嫁となり、ディキンソンの詩作上の一種の仲間 (兼批評家) になった Susan Gilbert (Dickinson) への手紙があるが、それらは数が多いこと、ディキンソン詩の内容に踏み込んだ批評的文章等が多いこと、そして生涯にわたる手紙のやり取りであることから、その全貌については短いスペースでは取り扱うことは不可能であり、恐らく別の独立したモノグラフないしは著作を必要とするものと思われるので、今回は訳出しなかった。

そういうわけで、本稿ではディキンソンの身内への手紙、特に少女時代の手紙の中から代表的なものを訳出して、ディキンソン文学の萌芽期の精神的な変化について、若干の考察を脚注的に記しておくのである。

2. Abiah Root への手紙

[L6. 1845. 5. 7 14歳]

親愛なアバイア、

あなたにこの前会ったときからまるで一時代も経った感じだわ。友達が離ればなれになっているのだから、文字通り一時代よ。手紙を頂いて嬉しかった。書かれていることを読んで楽しかった。特にあなたがいつもそう呼んでいた「ピニィちゃん」のレッスンを受けているところなんかね。でもいいこと、私の先をいかないようにね。父さんはもうすぐ私にピアノを買ってくださるみたい。自分だけのピアノを持てるなんて何と幸せなことでしょう。この前あなたがここを訪問したときから、時は経つもので、多くの変化があつたみたい。S. T.さんと N. M.さんは結婚の誓いを立てたみたいです。ヒッチコック学長先生は新居の方に移られて、お向かいの T (タイラー) 先生が、

ヒッチコック先生の旧居に入られました。そしてC先生が、タイラー先生のこれまでのお住まいに転居されようとしています。

……ヴィニーは今朝、父さんとボストンに行きました。2週間の予定です。それで私は今一人を楽しんでいるというわけ。妹は今頃はボストンに着いて、きっと口と眼をあんぐりぱっちり開けて、町を見つめていることでしょう。私は今晚、散歩して来ました。そしてとても素敵な野の花を摘んで来ました。いくつかをあなたに上げられたらいいな。ヴィニーと私は今学期、一緒に学校（中学校）に通い出しました。素敵な学校です。生徒数は63人。科目は4つで哲学、地質学、ラテン語に、植物学を取っています。何と大層に響くことでしょう。あなたはそんな大層な科目は取っていないわよね。……私の植木の草花は今は元気そう。手紙に添えてゼラニウムの葉を送ります。それを押し花にして頂戴ね。植物標本を作っていますか。もし作っていなかったら、是非作ってみたらいいわよ。きっと宝物になるわ。大抵の女の子たちは作っているのだから。もし標本採集をしているのなら、ここに生えている草花を送ってあげましょう。今学期、学校の方はいかが。先生たちは、ここの先生たちのように楽しい先生たちですか。恐らくあなたのところには取り澄ました、堅苦しい生徒たちが沢山いて、きっと礼儀とお行儀の申し分ないお手本になっていると思います。もしそうだとすると、あなたの自由な精神が縛りつけられないようにね。こんなタイプの人たちはいないにしても、いい子ちゃん、先生たちの取り巻き連の人たちは必ずいるものよね。

私は今、本当に急に綺麗になって行きます。17歳になったら、きっとアマストーの美女になっているんじゃないかしら。その歳になったら、賛美者たちの群が引きも切らないでしょう。そうしたら、みんなに、私からの返答を待たせて、楽しむことにしましょう。私が最終決断を下すまで、息を殺して待っている緊張した男の人たちことを見やりながら、きっと楽しむことしましょう。でも、ナンセンスはここまで。

……

今、木々がどんなに美しいか気づいていますか。香りのいいお花で完全に被われています。……ヴィニーが行ってしまったので、私はやることが一杯でした。思いの外多すぎて、今日まで手紙を書くことを引き延ばすことでした。でも許して、忘れてね、アバイア。これからはもっとちゃんと書くから。すぐ返事を書いてね。長い長い手紙を書いてね。もし書く暇がなかったら、あなたが私のことを思っているという証拠に、白紙の便箋でもいいから送るのよ。私たちは丘や川で隔てられているけれどきつとよ。

女の子一同からあなたに宜しくって。すぐ返事をくださいね、忘れないでね。便箋が一杯になったので、これにておしまい。

あなたの親愛なる友達

エミリ・E・ディキンソン。

[註と評釈] ジョンスンの註によると、エミリは当時、生物学を勉強していたので、この頃、押し花の標本作製を始めたのであろうと推測されている。現在、丁寧に集められ整理された標本は、ハーバード大学稀覯本図書館に所蔵されている。

Edward Hitchcock (1793-1864) 地質学者。1845. 4~11 アマースト大学学長。科学と宗教とを和解させるような世界観を持っていた。

「アマーストの麗人」(“the Belle of Amherst”) “Belle” とは「美しい婦人」あるいは「社交界の華」というほどの意味のフランス語。麗人と訳してもいいだろうが、美女と訳した。

Abiah Root はアマースト・アカデミー(小中学校)時代の親友。今は他の都市に家族と一緒に転居して離れ離れになっている。エミリ・ディキンソンはこの手紙が書かれた14歳の頃、屈託がなく、伸び伸びとして生きている。それに愛嬌と知性があったのであろう周囲の人からも愛されていた。自分のことを年頃の17歳になったら、美貌と才気とで取り巻き連の男性たちをかしづかせ、振り回してやれると信じている。これは、自分が愛嬌があり人気

あることを、美人だからと取り違えるという、小中学校時代の少女によくある誤解の一種とみなされよう。両親や地域の大人たちの庇護的な眼が行き届かなくなり、遠方の学校(女学院)の寮生活の中での純粋に学業成績、体力・知力・如才なさ・社交性等の試される場で、ディキンソンは急速に自分が一種の変種、「醜いアヒルの子」であることを悟ることになる。

またこの頃の手紙には、専ら学校生活のこと、即ち学科のこと、先生たちのこと、友達たちの消息が記されていて、ディキンソンが学校っ子、つまりは教育者一家の子弟で、真面目で真剣で模範的な良い娘であったことが知られる。このことは、やはり指摘されてしかるべきであろう。つまりは、後年有名となった「白衣の隠遁詩人」という特異な存在形態は、人生の初めからあったのではなく、やはりディキンソンにも他の少女たち同様に、明るく元気で、自意識がなく、伸び伸びとした学校生活を送っていた時期があったということだ。

[L10. 1846. 1.31 15歳]

親愛なるアバイア、

心のこもったあなたからのお便りへのご返事が、随分と遅かったと思っているのでは。特にあなたが手紙をくれた状況のことを考えたらね。でもアバイア、あなたの手紙を受け取った後の、私のことを知ってくれたら、ご返事が遅れたこと、きっと納得して許してくれると思うの。

私の手紙への早速ご返事、嬉しかった。他のことだったなら、きっともっと早くに答えたことでしょう。でも、あなたがどっちの道を探るべきかについて迷っている最中に、私の方から何か言って寄越せば、あなたの注意を大切な問題から逸らしはしないかと思ったの。私はあなたの手紙の、特に最後のところを読んで随分と涙を流した。あなたのために万事よかれと思いながらも心配しています。アバイア、私だって同じ気持ちだったのだから。私の方は、もう少しでキリスト教徒になるようにと説得されかかっていたこと

よ。私はもう再び、無思慮になったり、世俗的になったりすることはないだろうと思ったほどです。つまり、私が「主」を見つけたと感じたこの短い間ほど、完全な平安と幸福とを感じたことはないのです。でも、私はすぐに朝のお祈りを忘れてしまい、また面倒臭くなってしまったのです。徐々にいままでの習慣が戻って来て、私はまた宗教のことなどに構わなくなりました。私はあなたからのお返事を聞きたいです。どちらの決断をしたのかしら。私はあなたはキリスト教徒だと思う。と言うのも、天国という宝がなくて幸せになれる人なんてありえないと思うから。キリスト様を愛さずして幸せになれるなんて思わない。

私の場合、幸せ一杯のときでも、必ず喜びの中には棘があるのよ。薔薇には必ず棘がある。私の心の中にはうずくような空虚さがあって、この世ではそれを決して満たすことができないと確信しています。宗教の問題については、私は決して無思慮どころではないのよ。私は常々キリスト様が私に「娘よ、お前の心を捧げよ」とおっしゃる声が聞こえます。きっとあなたは、ずっと以前から決心をなさっていたことと思います。きっと時のはかない喜びを不滅性の王冠と交換なさったことでしょう。きっと天国での輝かしい天使たちが、悔い改めたばかりの罪人の歌に合わせて金色のハープを奏でたことでしょう。私は時々、天国の門が私を受け入れるために開き、天使たちがこぞって私のことを、妹よと呼ぶことを望んだりしています。私はずっとキリスト教徒になることを、先延ばしにして来ました。悪の声が耳元で囁きます。まだ時間十分に残っているのだと。私はふんだんに差し出されている慈悲に対して心を閉ざしていることで、毎日生きるたびにますます罪を犯していると感じます。この冬の間、当地でもリヴァイバルの催しがありました。集会は老若男女で大盛況でした。真剣なことを一番声高に嘲っていた人たちが、真っ先にその力を見てとって、キリスト様を受け入れました。天国が罪深い人たちに対して、いかに近くまで寄って来るのかを見るのは、実に素晴らしいことでした。宗教なんかには何もないさと感じている者たちが、一度出か

けてみて、そこに何かがあると発見するや、彼らはたちまち気持ちを動かされたみたいでした。

アバイア、きっとあなたは信じないでしょうけれど、私はこの冬、どこの集会にも行かなかったのよ。きっと簡単に乗せられて騙されてしまって、自分自身のことを信頼することができなくなると感じたからです。沢山の人たちが真剣に心を込めて話をしてくださったので、私よりも偉大なあの方の要求に屈しそうになりました。日々、そのような慈悲深いキリスト様と一緒に生きていながら、あの方とその大義について不実の状態にいるなんて、何と私は恩知らずなことなのでしょう。

永遠性はあなたにとって恐ろしくありませんか。私はしばしばそのことについて考えてみますが、それは私にとってすごく暗いものに思われるので、永遠性なぞいっそなければいいがと思うことがあります。死を皆が恐れている。でも未知の世界に導かれて行くという終わりのない永遠の存在の仕方に較べたら、救いに見えます。なぜかは知らないけれど、私は私の生命がこの世から消えてなくなると思えないのです。いくら想像力を拵げてみても、私自身の死の場面を想像することはできない。私がいつの日か、死んで眼を閉じるとは思えない。お墓が私のついの住処であるなどとは実感できない。友達が私のお棺の上で涙を流し、生きている者たちの間に立ち混じって生きるということを止めた者として、私の名を呼び、私の肉体から離れた魂が、今はどこに飛んで行ってしまったのかと訝しがられるなんて考えることができない。人生の盛りにお日様の前の露のように、眼の前から消えてしまった友達が、もう通りを歩くこともなく、人生という偉大な劇の中で自分の役割を演じることもなくなるということは想像できない。私がその人たちに今度会うときは、もう一つの遠い異なった世界だなんて信じることができない。私たち皆が、神様の法廷において無罪とされ、「よく頑張った忠実な僕よ、汝の主の喜びの中にはいれ」という歓待の言葉を掛けて貰えますように。

……翼に乗ってさっと通り過ぎ去るようなこの一年が終わる頃までには、

きっと私たちのうちの誰かが天上の審判の席に召されていることでしょうね。そして、最後の審判のときに、私たちが別々にならなければいいかと思えます。というのも、私たちの友達が暗闇の悲嘆の場所に連れて行かれて、そこでは決して死ぬことのない蛆虫がおり、水でも渴きを癒すことのできない火が燃えさかっているなどとは、何と悲しいことでしょう。私たちが天国でも変わらざる仲間であり続けるとは、何と楽しいことでしょう。

私はあなたの手紙をアビィのところを持って行きました。そしてアビィも私と同じ気持ちで、何度も何度も読みました。私たちはあなたがヨリよい方を選んで、それが終生変わらないようにと願いました。アビィからも宜しくとのことで、この世のそしてまた永遠のあなたの幸せを祈りますとのことでした。アビィはお便りを待っています。それもすぐにね。アビィと私は、お便りを貰ってから、あなたが一体どちらを選択したのか、あるいは真剣なことを考えることを止めてしまったのか窺うまでは、気持ちが落ちつきません。すぐ手紙を書いて頂戴。あなた自身のこと、あなたの気持ちを教えて頂戴。あなたからの手紙に長いことご返事しなくてすみません。私はキリスト教徒ではないけれど、手遅れにならないうちにこの問題を考えてみることの大切さを深く感じています。

あなたの親愛なる友

エミリー・E・D-

[評釈] キリスト教の信者になり、教会員として登録するかどうかということについて真剣に受け止め、それを遠くに住んでいる親友のアバイア・ルートに打ち明け、相談したときにやり取りした手紙。

Jonathan Edwards (1703-58) の地獄の火の燃える有様等についての説教 (“Sinners in the Hands of an Angry God” など) の一節などが、当時の教会等で説教師たちから活写され、伝えられていたのであろう。死後、一定の時間が経ち、最後の審判の場に引き出されたとき、天国に行くのか地

獄に落とされるのかの審判を受けるといふ、Puritanism の Predestination (運命予定説) の教義を、19世紀初・中期の New England 地方の人たちはごく自然にかつ真剣に受け取っていた。ディキンソンは謹直な教育者・法律家の父を持ち、教育一家の長女として、教会や教室で教わることを真剣に受け止める、純粹培養的なものの考え方をする人間であった。

ディキンソンが、マウント・ホリヨーク女子学院でキリスト者になる決断ができなかったことの大きな原因には、そもそも父 Edward 自身が当時正式の教会員でなかったということがあったのではないかと、私は考えている。(母は昔から教会員であった。)父は1850年8月になって、ようやく First Congregational Church の教会員として登録し、また将来兄嫁となる Susan Huntington も同月同日に同教会に登録した。妹の Lavinia は11月に登録している。そして兄のオースティンは、自分の結婚が間近に迫った1856年1月に教会に登録した。このようにディキンソン家の人たちの教会登録には、相当の迷いがあったように思われる。ディキンソン家の人たちは、教会での牧師たちの説教および教会制度についてあまり信をおいていない感じがある。ディキンソンが生きた19世紀の中葉は、ある意味で、時代の分水嶺にあり、エドワードは古風で純粹でシリアスなピューリタンの典型であったから、一種形骸化している教会に登録することについて相当に迷っていたということではないだろうか。当時は、Darwinism の到来の直前の時期であるが、ディキンソンの父親の迷いは、そのような新来の科学思想から来るというより、むしろ逆に、古い保守的なピューリタンの信仰から来ているのではないだろうか。

エミリ自身もこのようにして信者になるかどうか迷っているうちに、結局教会員として登録する機会を失った。一方、彼女は生来形式にこだわらず、自己の欲求のままに自然に生きる場所があったようである。それでお祈りも教会に通うことも結局忘れて、もとのぐうたらな生活に戻ったと告白している。ある意味では自由で気儘なタイプで、想像力と夢想力を羽ばたかせら

れる生活が一番性にあっていて、つまりは天性の詩人肌であったということであろうか。ともあれ、エミリは教会に登録せず、そのうちに教会にも通わなくなり、教会制度や、ある意味で退屈な説教というものへの思いを反抗的な詩に書くようになった。

[L18. 1847.11. 6 16歳]

南ハドレーより

親愛なるアバイア、

私は今実際にマウント・ホリヨーク女学院に来ていて、ここがこれから長い一年間の私の住処になるというわけ。あなたの心のこもった手紙を受け取って嬉しく、私の手紙もそうあってほしいなと思う。私が家を離れてからほぼ6週間経って、これまでで一番長く家から離れていたことになる。二、三日すごくホームシックになって、ここにはとても住めないだろうなと感じたこともあったのよ。でももし家や友達から離れても幸せがあるとすれば、私は満足して十分幸せと言えるのでは。家を離れては幸せになれない、という考えをあなたは笑うかも知れない。でも、私にはお気に入りの家庭というものがあったわけだし、今度のことは私の人生において、家を留守にするという初めての試練なわけ。お望みなら初めて両親の屋根の下を離れてからの、私自身のこと述べてやってよ。今度の木曜日で南ハドレーに来て丁度6週間になります。私は馬車の旅で疲れ切ってしまうと、おまけにひどい風邪に掛かってしまった。それで入学試験を受けることができなくなって、翌日から受験し直したのよ。

私は三日で受験科目を終え、予想通りでした。古株の生徒さんたちは、今回の試験はこれまでの試験より厳しい試験だったみたいと噂しています。ご期待に違わず、失敗することなく終えられたので嬉しかった。それできっとホームシックなんて掛からないだろうと思い決めました。でもたちまちその反動がやって来て、ちょっと類を見ないようなホームシックに掛かってしま

いました。今はそれなりに満足して2年次のおさらいをしています。思いのほか試験が難関だったと見え、大勢の人たちが学校に入学できなくなったのにもかかわらず、学校はとても大きく、生徒数は計300人程度です。ご存知のように校長のライアン先生は、今年の応募者が多かったので、入試を例年より難しくして、ここの学校の学力アップを計っておられるみたいです。

入学試験がどんなに厳しいものか、きっとあなたは想像できないと思うわ。なぜって決められた時間内に解答を書かないと、家に追い返されてしまうのだから。私は試験をできるだ早くに片づけられて、この上もなく感謝しています。この世の宝を上げるからと言われても、この三日間に耐えた緊張感にもう一度耐えられるものではないわ。

私は三年生の従姉のエミリと同室です。エミリはとても立派なルームメイトで、私を幸せにすることなら何でもしてくれます。あなたは寮生活が長いから、よいルームメイトがどんなにかいいことか分かることでしょう。ここでは万事が快適で楽しいです。それで家を離れて住むということにかけては、他のどんな所に行っても、ここより楽しいとは思いません。想像した以上にくつろげるし、先生たちも皆、親切で同情的です。しばしば私たちの居室をご訪問されますし、また向こうにも訪ねて来るように言われ、実際に伺ってみると、心から歓待してくださいます。

あなたが一日の日課を教えてくれたから、私の方も日課表を知らせましょう。6時に全員起床です。7時に朝食。お勉強が8時に開始。9時に大広間に集まってお祈り。10時15分に古代史の復唱、その関係でゴールドスミスとグリムショーを読んでいます。11時にポープの「人間論」の授業、これは翻訳。12時に柔軟体操。12時15分から12時半まで黙読。食後の1時半から2時まで広間で合唱。2時45分から3時45分までピアノの練習。3時45分からグループに分かれて一日のことの報告会。欠席、遅刻、連絡、静粛な勉強時間を邪魔しなかったか、部屋に友達を入れなかったか等々細々したことの点検で、言い出したら切りがないわ。4時半に私たちは広間に集まって、ライア

ン先生から講義の形で忠告を受けます。6時に夕食。それから8時45分に就寝の鐘が鳴るまでは勉強時間。しかし、一日の最後を告げる鐘は9時45分まで鳴らないので、私たちは就寝の鐘の合図に従いませんが。

上に言った事項のどれひとつ守らないで、ちゃんとした理由がないと記録されて、名前の上に黒印がつけられます。ここでは専門用語で「例外的存在」などと呼んでいます、そんなことになりたくないことお分かりでしょう。私に割り当てられた仕事は特に難しくはなく、朝昼晩とテーブルの第1列目からナイフを持って来たり、洗ったり拭いたりすることです。私はこれまでのところまあ上首尾に来ていて、病気にならずに一年間暮らせばいいなというところ。あなたは多分、この食事についてあれこれと聞かれたと思いますが、その点については、聞くと見るとこれほど違っていることはありません。300人もの女子生徒たちの食事としては健康的で豊富で、想像したものよりも立派なものです。食事のメニューもバラエティに富んでいるし、しばしば変わります。一つだけ確かなことは、ライアン先生も他の先生方も皆、あらゆる点で、私たちが快適で楽しいかどうか気をつけておられて、とても気持ちよく感じます。私が家を出たとき、大集団の中で友達や親友ができるなどとは思いませんでした。私は、粗野で洗練されない態度を取る人が多いのではと予測していて、確かにその様な人たちもいましたが、でも全体的には上品で気取らずに、お互い同士仲良くやろうとする意欲がみえて、嬉しく、同時に驚きもしました。アビィやアバイアやメアリみたいな人たちはいないけれど、私はここの女の子たちが好きよ。ここへ来て二週間ばかりして、兄のオースティンが、ヴィニーとアビィを連れて会いに来ました。皆に会えて何と嬉しかったことか。また「みんなとても淋しいよ」と言ってくれるのを聞いて、どんなにか幸せな気持ちになったことか。自分がいなくて淋しいよととか、家で皆が私のことを思ってくれているなんて分かったら、とても嬉しい。今週の水曜日、私が偶々窓の所において、ホテルの方角を見ていたら、何とお父さんお母さんがこちらに向かって堂々として歩いて来られるのが見え

るではありませんか。私は小踊りし、手を叩き、会うために飛んで行ったのは言うまでもありません。気持ちは分かるでしょう。あなたもご両親好きだから、きっと分かることでしょう。父さん母さんは私を驚かせようとして、訪問することを予め知らせなかったみたい。私は父さん母さんに帰って貰いたくなく、帰る時間が来て悲しかったけれど、渋々それに従いました。アバイア、考えても見て、2週間したら、私は再び懐かしのわが家に帰るのよ。あなたも感謝祭の時までには帰宅するのでしょうか。そしたら、私たちは会えて嬉しいわね。

……アビィからはしょっちゅう手紙が来ますし、手紙を貰うことはとても嬉しいです。昨夜アビィから長くて大切な手紙が来ました。アビィはあなたからも手紙をほしがっていました。あなたは恐らくO・コールマンさんの死について聞いたことでしょう。何と悲しいこと！ イライザさんが、彼女の死んだときの様子について長い手紙で知らせて来ましたが、それはそれは美しく感動的で、こんど会ったときに教えてあげるわ。

アバイア、手紙を沢山頂戴。私も時間があったら書くから。私は家を離れているので、手紙を沢山書かなくてはならないのよ。従姉のエミリちゃんからも「アバイアさんに宜しく」とのこと。

あなたの親愛なる

エミリ・E・D-

[註と評釈] Lyman Coleman は Amherst Academy の校長 (1844~46) であった。その娘の Olivia Coleman の死について語っている。

Mary Lyon (1797-1849)。熱心な独身の教育者で、マウント・ホリヨーク女子学院の創設者。エミリがマウント・ホリヨーク女子学院に入学した1847年は、女子学院は創設10年目を迎え、ライアン女史は学院の基礎固めで、文字通り獅子奮迅し、キリスト教を中心に据えた教育方針で躰に厳しかった。皮肉なことに、エミリが衝突し学院を退学した翌年の1849年に急逝した。

ディキンソンの手紙(3) 身内と友人たちへの手紙

Emily Lavinia Norcross (1828-1852)。Monson の出のディキンソンの母の長兄の娘。

Olivia Coleman。ディキンソンがマウント・ホリヨークに出発する2日前に死去。父はアマースト・アカデミーの校長であった。このオリヴィアの妹の Eliza は、その後父と一緒にフィラデルフィアに転居し、エミリはその家族を両親とともに訪ねた（1855年）ことがある。

エミリは、アマーストの両親の家を初めて離れて、馬車でマウント・ホリヨーク女子学院に到着したはいいが、病気で熱を出し、入学試験を個人的に延期して貰って、翌日から受験し直した。入学当時から健康上の問題を抱えていたことを示す手紙である。また学科や試験というものに対して、失敗することを極端に恐れ、異常に神経質になり全力投球をする超真面目なタイプであることが知られる。「この世の宝を上げるからと言われても、この三日間に耐えた緊張感にもう一度耐えられるものではないわ」と記しているぐらいである。

またこの手紙には、女子学院の日課表が細かに記されているが、時間と規律と宗教教育に縛られた兵營的なものようである。これでは、両親と家族思いで、自由を一番に置き、縛られることを極端に嫌ったディキンソンがホームシックに掛かったことは、十分に理解できる。

[L20. 1848. 1.17 18歳]

南ハドレーより

私の友アバイアへ、

.....

今学期は今週の木・金に終わります。再び家のみんなと友達に会えます。今学期は一生懸命勉強したのですが、家に帰れるという喜びの他に、休養ができるという楽しみがあります。今学期は一年で一番長く感じられて、二度と繰り返したくないです。私はこの女学院が好きで、すべての先生たちは愛

情という絆で私の心と結びつけられています。ここには気立てのいい女子生徒がいて、新顔の人たちの中にも好きな人たちがいます。でも粒よりの仲良し同士が集いあうまでには行っていません。ここでは無理だと思っています。私は「シリマン著化学」とカトラーの生理学を勉強していて、両方とも面白いです。今学期の終わりまでには、生理学を終えて、次の学期が始まって5週間したら試験があります。すでに今からそのときのことが恐いです。というのもホリヨーク女学院の試験は、これまでの学校のよりか若干公の感じがして、そこで失敗するのは不名誉な感じなのよね。でも父の言葉の言いぐさで「不名誉にならざるべからず」と望むのみです。……従姉のエミリちゃんからも宜しくとのことで、私に返事を書くときには、短くてもいいから書いてねとのこと。早くにとのこと。

あなたの心のこもった「妹」

エミリ・E・ディキンソン

当地では随分と宗教的関心が高まっていて、多くの人たちが安全の箱船へと押し寄せています。私はまだキリスト様のご要請に身を任せていないけれど、そのように大切に真剣な問題に無思慮になっているわけではないので、その点お間違いなく。

[註と評釈] ここには、ディキンソンが女子学院で、本格的な理科教育を受けていることが知られる。特に化学、鉱物学、植物学がアマーフト大学の理科科目の特徴のようであり、その後、内村鑑三がアマーフト大学の教養課程に入学し学んだとき(1883-85)にも、そのような科目を教わると同時に、キリスト教教育を受けたことが知られている。内村は特に鉱物学が得意だったという。またアマーフト大学出身で、その後マサチューセッツ農学校の校長となり、後に北海道農学校の教頭として招かれた(1877-8)クラーク(先生)は、北海道農学校で、聖書の購読の他に地質学・植物学を教えていたことが知られている。

ディキンソンは、アマースト・アカデミーで聖書、それにラテン語・ドイツ語を学んだが、マウント・ホリヨーク女子学院では、聖書はもちろんのこと、本格的な理科教育、それに地理学等を受けた。つまり、彼女の受けた教育は生半可なものではなかったのである。そして、彼女の詩にはそのような科目に由来すると思われる専門用語がふんだんに見られる。

[L39. late 1850. 25歳]

今夜はアバイア、あなたに手紙を書くのは寒く静かな夜だから。そして熱を帯びた一日の苦労と心配を忘れることができるから。そして私は淋しいと感じているのだから利己的なよね。私の友達はこの学校を去ってしまった者もいるし、眠っている者、教会の墓地で眠っている者もいる。夕方の時間は淋しい。夕方はかつては私の勉強時間だった。私の先生は去ってしまわれて、永遠の眠りについておられる。そして本を開いたまま学校の生徒が一人ぽっちで涙を流している。私は涙を払いのけることができない。払いのけられても払いのけられない。なぜって、この世を去ってしまったハンフリー先生に捧げられる唯一のものは涙だから。

あなたはかつて墓のそばに立ったことがありますよね。私は墓地を快い夏の夕方、歩いて行って墓石の名前を読んだりした。そして私のために誰かがやって来て、同じように思い出してくれるのだろうかなどと思った。私はこれまでお墓に友達を葬った経験はなく、みんなもまた死ななくてはならない運命だということなど忘れていた。これを知ったことが私の最初の苦惱で、それに耐えることは本当に難しい。あまりに多くの人を失って、この世にもう家などない人たち、友達との交わりがお祈りの中でしか得られない人たちにとっても、望みは残されているに違いない。しかし、心を慰めるものが神様以外に残らなかった場合、その精神は本当に淋しいものだ。私は春がやって来て、太陽の光もなく、歌う小鳥もいないときのことを思う。そのとき草が緑に茂っているとき、私は早くお墓に行くことをむしろ求める。私はもし

鳥たちが優しい歌を歌うのなら小鳥を呼ぶだろうし、心優しい眼をした野草を求めよう。そして、低く鳴く瞑想的な昆虫を求めよう。アバイア、私たちが愛する者がそこに埋められて眠っているのなら、お墓というのは何と貴重なものであることか。もし失われた者たちが淋しいと感じるのなら、愛情を注ぎたくなる。私はもうこれ以上言いたくない。私の考え方は反抗的で、私が愛し信頼する友達にいまは許して貰うことが多い。私は、むしろ他の誰かであればいいと思う。私はパリサイ人の祈りを唱えます。でも私は小さな「収税吏」で「ダビデの子」です。どうぞ、軽蔑して！

……

あなたは私より賢くなっていく。私が花咲かせようとする空想力の蕾を摘み取ってしまう。もし摘み取ってしまったら果実は実らないので、私はそれを苦いと感じる。

アバイア、岸边は安全よ。でも私は荒海とぶつかりたいの。私はこの楽しい海の中に悲惨な難破者を数え上げることができ、吹く風を聞くことができる。でも、ああ私は危険が好きなのよ。あなたは抑制と確固さとを学んでいる。イエス・キリストはあなたの方をもっと愛してくださるわ。あの方は私のことを少しも愛してくださらないのではないかと思う。できたら書いて来て頂戴。ここに書き切れなかったことは忘れて頂戴。精神の全き交流に対して不完全な言葉、よりよい生活である永遠の生に対してこの小さな不確かな生、そして私たちはこの人生を生きるべく、そして本当の交流で満たされていたら、私は祈ることを止めないでしょう。

[註と評釈] Leonard Humphrey (1824～1850)。若くしてアマースト・アカデミーの校長 (1846～47)。1850年11月13日脳脊髄膜炎で死去。この手紙は、ハンフリーの死から一ヶ月半後に書かれているので、ハンフリーへの追慕と、自分自身が死ぬということは、考えることができないというようなことが書かれている。

ディキンソンの手紙(3) 身内と友人たちへの手紙

パリサイト“Pharisee.” 聖書の中の信仰よりも、古い形式や儀式を重んじた。
収税吏“Publican.” マタイ伝第9章第10節。
ダビデの子“Son of David.” ソロモン王のこと。

この手紙は1850年12月31日に書かれているが、アビィ・ウッドは前年の夏の信仰復活運動の行事に影響を受け8月に教会に加入した。エミリは、48年夏にマウント・ホリヨークを退学してからは、自宅にて自学自習していた。当時は高等教育を受ける者たちは数が少なく、エミリには挫折感があったというより、自分の時間が持てて、自由にアマーストの生活を楽しんでいる感じである。

ハンフリーの死に臨んでの想念を記している。ディキンソンが慕っていた多くの人たちの夭折・死去 (Ben Newton, Stuart Stearns, etc.) を巡る思いを記した最初の例。特に南北戦争時の若い青年たちの死は、ディキンソンの心に大きな影を落としている。実際に看護師として戦争に参加したホイットマンと違って、ディキンソンには戦争そのものを描いた詩は少ないが、南北戦争の落とした影は大きい。

「私は墓地を快い夏の夕方、歩いて行って墓石の名前を読んだりした。」という箇所など、後年、ディキンソンの名詩 No. 1147 (“After a hundred years”) にそのまま表現されることになる。

3. 兄の Austin Dickinson への手紙

[L19. 1847.12.11 17歳]

サウス・ハドレーより

私の親愛なるオースティンへ、

.....

昨夕、ユークリッド幾何学の試験を終えてどれも解けました。4冊の本をやっつけてしまって何と嬉しい気分にいるかご想像できるでしょう。という

もの全部をやろうものなら、無限の時間がかかるのだから。次の水曜日を待ちきれないでいるところです。兄さんと Mary Warner にそのときに会えるからね。もちろん、兄さんは私のことをがっかりさせないわね。家の皆は元気ですか。また今度の冬休みは何をするの。ヴィニーが言うには兄さんは「アラビアン・ナイト」を読んでいるそうですね。精読してためになるといいわね。それによって兄さんの想像力が大きく広がると思うわ。でも一言助言を書いてもいいかしら。想像力を磨くのと同程度に他の能力をもお磨き下さいと。私って何と賢い若いレディなことね。私、こっちの科目が何だったか言うのをほとんど忘れるところだった。「遅ればせにて失敬」。それらは化学、生理学、それに幾何学（ただし4分の1学期）。私は4科目を済ませてまああの調子だったと思うわ。兄さん、実は昨日は私の誕生日だったのよ。何と17歳になったなんて信じられない。ジェイコブ・ホルトさんは、この前、書いて来たときから良くなっていないの？ 望みは残っているの？ 家の人たちみんなに宜しく。次は長い手紙を書くから。兄さんが子供だましのお菓子が好きだと知って、ウェィファーを一箱送ったから受け取ってね。手紙を書くとかの大事な場合に食べてね。別段それに限るわけではないけれど。

お父さん、お母さん、ヴィニー、アビーやメアリーにも宜しく。

あなたの愛情深い妹の

エミリより

[註と評釈] エミリは、学校からの手紙には必ず学科のこと、それを十分にマスターしていることを誰にでも伝えているようである。ついに17歳になったことが書かれている。残存するエミリの写真はこの女子学院に入学して、恐らくすぐの頃に撮影された肖像写真だけであるが、その16歳時のときの写真だけを頼りに、私たちはエミリの姿形を想像した来たわけである。しかし16歳と言え、彼女の手紙にもあるとおり、不安と緊張に満ちた学校生活の開始の頃で、その表情には不安ととまどいが見られて、後年の確固たる主張あ

るディキンソンに変貌する以前の写真である。従って、私たちはディキンソンの性格について、相当に誤解し早のみこみをしているのかも知れない。極く最近の伝記には、もう一つのディキンソンの写真が発見されたとして掲載されているが、それは知的で一筋縄では行かない30女の風情である。(Cf. Alfred Habegger, *My Wars Are Laid Away in Books: The Life of Emily Dickinson*, 2001, p. 366 の後続く写真)

[L52. 1851. 9.23 20歳]

.....

私たちは無事家に着いたわよ、オースティン兄さん。ここはとても淋しいわ。私はどっちがいいか決めようとして、やってみた。両親のいる田舎の家がいいか、あるいは煤煙と塵埃の都会で兄さんと呼ぶ人と暮らすことがいいか。秤はなかなか平衡を取れない。でもやっぱり兄さんの方の勝ちかな。家の人たちは私たちがいなかったときより、今の方がずっと淋しそうよ。父さん母さんは、私たち二人が道々うろうろしようやく帰宅はしたはいいけれど、二人の面倒を見る者が誰も随いて来なかったのが不憫だったみたいよ。私たちが家を空けていたとき、父さんと母さんはとても元気にしておられて仲も良かったみたい。父さんが留守の晩は、エメライン・クレッグさんがお母さんのところに来て、番をしてくれたそうよ。沢山友達がやって来て、また相手方を訪問したりしていたそうよ。お母さんは私たちがいなかったときほど忙しかったことはなかったと、言っておられる。果物をもぎ取ったり、植木の手入れをしたり、鶏の面倒を見たり、お友達の気遣いをしたりと、あまりに忙しかったので何をしていいか分からなかったみたい。

.....

母は私たちが買った物の他にシャツを3着送ろうとしています。忘れっぽの息子が持って行き忘れたチョコキもね。お母さんは次の便があり次第、全部を送ります。私たちも機会があり次第果物を送ります。とてもおいしいわ

よ、おいしいのだから!!

母とヴィニーからも宜しくとのこと。

淋しい妹より

[評釈] 兄思いのディキンソンのことが偲ばれる手紙である。エミリは、マサチューセッツの小さなアマーストの町で両親と暮らす生活と、塵埃と騒音の大都市ボストンの兄のアパートでの生活と、どちらがいいのかと質問を投げかけている。アマーストはボストンの西方200キロに位置し、当時の町の人口は4000人ぐらい。町の中心から少し外れた、ディキンソン邸は約2000坪。周囲は緑の木立と芝生が綺麗な閑静な地域にある。そのアマーストの田園と、騒音と塵埃の大都会のボストンを比較し対照して考えるのは、田園詩人ディキンソンの癖であった。静かさ、平和、広い空間、綺麗な空気、丸花蜂、クローバー、野の花、ボボリンク鳥のさえずり、森閑とした林、月光、朝日、夕暮れの風景などは、ディキンソンの自然詩にふんだんに見られる。こういうところに、ディキンソンの清浄な水と空気と環境を愛するエコロジカルな(Eco-feminism 的な)田園詩人としての片鱗が見え隠れするといっていよいであろう。

[L67. 1851.12.31 21歳]

今は夜も更けています兄さん。でも、兄さんのことを思わざるをえない。病気しているのではないかと心配している。オースティン兄さん、もしすぐに良くなるかどうか分からないときは、明日帰って来て頂戴。そっちで病気に罹ってもらいたくない。ヴィニーからも伝言よ。私たちはまだそちらからのご返事を頂いていません。これ以上は書きません。でも今すぐ病気がよくなるなら、兄さん帰って来て頂戴。

愛を込めて、

エミリ

[註と評釈] ディキンソンの兄への手紙には、専ら兄の健康のことについて尋ね、心配する手紙が多い。まるで母代わりで、あまり勉強に精出して病気にならないようにねというような事ばかりが目立つ。ディキンソン家の唯一の男系の跡継ぎとして、またハーバード・ロースクールを目指し、一家の財産と知的伝統とを継ぐ者として、兄オースティンへのエミリの敬意と期待は絶大であるようである。従って、そのディキンソン家の次世代の跡継ぎと目されたオースティンの第2子 Gilbert Dickinson が腸チフスで急死した事件(1883.10. 5)は、ディキンソン家の希望をうち砕く痛恨事であった。(オースティンの長男 Ned は生まれたときから病弱で首が据わらず、おまけにてんかんの持病があり、ディキンソン家を継ぐだけの健康が備っていなかった。それで、幼少時から才気煥発かつ眉目秀麗であった Gilbert には、文字通り掌中の玉として、ディキンソン家の期待が一心に掛かっていたわけである。エミリのオースティンへの手紙には、当時の家父長主義的な風土の中で、兄オースティンへの心からの尊敬と期待が窺える文章が多い。

[L72. 1852. 2. 6 21歳]

……

この前お便りしてから鉄道計画の一大決定があって、この町や近在では、みんなが大喜びしています。鉄道はサンダーランド、モンタギューとベルチャータウンを通ります。みんなが興奮して町中が沸き立っていて、意気軒昂として語り合っている人たちで溢れています。兄さんもここにいてこのお祭り騒ぎに加わわれたらいいのにね。祭りは D. Warner さんの主催で行われて、大砲も鳴っています。静粛の中にもみんなの心を満ち足りたものにしたのは、行事のクライマックスの認証式でした。お父さんは過度の満足からは醒めておられて、一番似つかわしい形で名誉を受けておられた。鉄道開通については誰もまだ信じられない気持ちだけれど、何だかおとぎ話のようで、私たちすべての人たちの人生の中で、最も奇跡的な事件だと思うの。

人々は来週からその仕事を開始します。考えてもみて、兄さん。私はひれ伏して、やって来た最初の「エリンの息子」を礼拝します。そして彼が掘り返した土は、私たちの英雄的祖先の苦闘と勝利の象徴として保存されることでしょう。スミス大佐とその奥さんみたいなご老人たちは自己満足で腕組みしちゃって、「やれやれ、ついにこぎ着けたか」ですって。「こぎ着けたですって」。何にも仕事をしなかつたくせに！ 私たちこそ各所からの冷笑や哀れみや嘲りにもかかわらず、実行したのだわ。兄さんがここにいてくれたらねえ。こんなときにいないのは残念だわ。こんな特別な場合には、兄さんの例の「ひゃっほー」という声、皆さんご承知の、兄さん得意の武者震いが見られなくて残念。でも兄さんは、実はここにいるのだと感じて安心しています。つまり兄さんの魂がここにいるのよ。見たところ不在だけれど、語の最高の真の意味においては、ここにいるのよ。私は言いたいことが一杯で、せっかちに喋っていると思う。でも手紙を読んだら何という意味かが分かるでしょう。Martha は順調に回復しています。着物が着られるようになりました。そして昨日ついに食堂に姿を見せました。マーサからも宜しくとのこと。彼女も書けるときにはすぐに書くとのこと。

……見習い教師の Hound さんが、水曜に来られて今日まで町におられた。木曜の夜ここでお茶を飲まれた。昨日の朝、ヴィニーを馬車で遠出に連れて行かれた。午後中ここにおられてさよならされてから、門を閉めました。それは今朝書いたとおり。この前書いた後、私は二度遠出しました。一度は Root 会社の人たちが乗せてくださり、昨夕は二年生の Emmons さんと二人きりで遠出しました。そのことは今度の便で書くわ。というもの、私は大忙しで息もつけないくらいなの。オースティン兄さん、身体には十分気をつけてね。私たちのことをいつも思いだしてね。私たちもあなたのことを思っているのだから。

エミリ

ディキンソンの手紙(3) 身内と友人たちへの手紙

[評釈] 鉄道が、ベルチャータウンとアマースト間に敷設されるということが決定したことを伝える手紙。この敷設には、当時州会議員であったディキンソンの父 Edward の尽力が大であった。ディキンソンには鉄道について書いた詩が若干あるが、それは力に満ちた鉄道や機関車への驚異と賛嘆の念に満ちている。それは汽車や汽笛や騒音や噴塵を文明の悪しき側面として、徹底的に嫌ったソローとは違っている。

当時、Emmons とデートしたことが知られていて、エミリはそのことをそれとなく兄に伝えている。エミリも当時21歳、結婚のことを十分に人並みに考えていて、デートの試みを伝えているわけである。

[L123. 1853. 5.16 22歳]

……

この手紙を書いていると汽笛の音が聞こえて、汽車が今は行って来たみたい。汽笛が鳴るたびに、私たちすべてに新しい生気がみなぎります。兄さんが家に帰って来たら、それを聞くのが楽しみだわよ！ 休みはいつからなの。それが知りたいです。もちろん帰って来るのよ。すぐ返事を書いて、いつ帰って来るか教えて。私たちが待ち設けられるようにね。

ドワイト牧師さんの説教が終わりました。後は皆さんが、牧師さんにこの牧師になって頂くよう決めるかどうかだわね。皆、ドワイトさんの説教には魅了されました。きっと就任を求められることと思います。あの方の半分ほども好ましい牧師さんの話を聞いたことがありません。スージーも彼のことが好きです。私たちもみんなそう。あの方が説教されるとき、兄さんにも来てみてほしいわ。

新学期が始まり、昨日沢山の学生がドワイトさんの話を聞くために集まりました。みんなからも宜しくとのこと。母は早速に兄さんに靴下を送ろうと言っています。

W・ケロッグさんからの小包届いた？ 急いで書いたので乱筆ですみませ

ん。でも私の書いたこと読めるでしょう。

[註と評釈] エミリの母の兄（つまり伯父）の娘が Emily Lavinia Norcross で、マウント・ホリヨーク女子学院での同室者であった。この従姉はその後、20歳半ばで肺結核で逝去した。母の妹（つまり叔母）の Lavinia の娘たち（つまり従妹たち）が Louise と Francis Norcross の姉妹。

1853年5月9日に Amherst と Belchertown 間に鉄道の運行が始まった。

Edward Strong Dwight は1853年5月24日アマースト第一教会から牧師職の就任を要請された。8月21日より代理牧師。1854年から1860年まで正牧師。

William Kellogg はオースティンの学友。ディキンソン家の隣人の家具商の James Kellogg (1792~1868) の息子。

ディキンソンは手紙の中で「汽笛が聞こえるたびに、生気がみなぎる」と書いていて、政治家の父が鉄道の敷設と開通に尽力したこともあるのだろう、汽車のことを好感をもって受け入れている。ソローは自分の住んでいた小屋のあるウォルデン池のすぐ近くを鉄道が走り、汽車が大きな騒音を立てて通り過ぎること、また自分が町に行く途中で汽車に出会ったときに、こちらから道（鉄路）を譲らなくてはならないことについて反発し、不愉快に思っていた。つまり、ソローは鉄道を、近代文明の悪の手先として、文明一般の自然への侵入の象徴として捉え、嫌い、鉄道および汽車には反発していた。

[L126. 1853. 6. 9 22歳]

親愛なるオースティンへ、

あなたのお手紙受け取りました。それをスーへ送ったわよ。ジェリはいつでも行動する用意ができています。すべてあなたの御意次第です。でもスー

はそれが最善の策とは思っていないので、そちらに電報が行くと思います。スージーと私は、今晚は兄さんに会えません。

あなたからのお手紙に一瞬どきっとしたわ。何か恐ろしいことが起こってあなたが殺されそうになっていて、お別れの手紙か何かかと思ったわ。でも今はすべて了解。

もし助太刀が必要ならジェリか私のところに言ってくるのよ。そしたら助けます。たぶん少しくらいはね。言われた中傷についてあまり気にしないでね。一顧だに値しないわよ。気にしないこと。

誰もスージーのことを傷つけられません。誰もあなたのことを傷つけられません。あの人たちはあなたから遠くにいるわけだし、恐れる必要はありません。私、髪の毛を短く切ったの。今度の手紙で髪の毛のこと書いてよ。手紙をすぐに書いてね。

私たちはみんな元気よ。昨夕、エモンズさんと馬車で遠出をしました。とても、綺麗だった。ニューロンドンの人たちが今日やって来ます。でも私、あまり関心がない。人出もあまり多くないと思う。兄さんがここにいてくれたらなと思う。オースティン、そんな馬鹿なこと気にしないことよ。だってスーのところまで追っかけて来っこないのだから。

みんなからも宜しくとのこと。

エミリ

[評釈] アマーストとベルチャータウン間の鉄道開通に際して、ニューロンドンの市民たちをアマーストへ招待するという企画が実行され、当日、アマーストの町はお祭り騒ぎになった。

どうやら、オースティンの恋人のスーザンには、何らかの形で結婚前に他の男性（たち）とトラブルがあった感じである。エミリはスーザンのことを大変気に入っていて、兄オースティンの妻になってほしいと、強く後押ししている。このようにして、オースティンはスーザンとの仲を深めて行く。

髪のを切ったことを知らせるなどといった、女らしい面を覗かせている。

エミリはまたなにげなく、兄と同時進行的に自分の方も Emmons というアマースト大の2年生とデートを始めたというようなことを知らせている。つまり、当時22歳になった適齢期真っかりのエミリは、人並みに結婚への準備行動を起こしていたということである。しかし、こうした1、2回のデートの試みも、その後、なかなか進展せず、男性候補者たちのディキンソン邸訪問についても、かなり辛い評点が付けられ、結婚相手として合格しなかった。その理由には、父が町の有力者でアマースト大学理事、兄がアマースト大学出の秀才でハーバード・ロースクールに通っていることから、小村ゆえにそうした社会的な地位に見合うような相手がなかなか見つからなかったということであろう。そのうち、父が国会議員にまでなってしまった(1854年11月)ことから、ディキンソン家が、ますます雲の上的な存在的になってしまったこと、さらには父が次の選挙で国会議員を落選したこと、それに母のエリザベスが病弱で、知的力に欠け、適切な助言ができなかったこと等が、エミリの結婚への判断を鈍らせたと言えよう。その後、父が突然脳溢血で倒れて死去したこと(1865年)、その一年忌の日に母が倒れて、長患いの病床に着いてしまったこと等が、結局、ディキンソンの結婚のチャンスをさらに遠ざけたということになるのであろう。

[L127. 1853. 6.13 22歳]

私の親愛なるオースティン、

.....

ニューロンドン・デイは、華々しく終わったわ。みんなもそう言っている。とても暑くて埃っぽい日だったけれど、誰も気にしていなかった。父さんはいつものようにその日、大将格だったわ。そしてニューロンドンから来た人たちを従えて、古代ローマの凱旋將軍みたいに、町中を行進して回られたわ。

ハウさんの奥様が午餐会を催されてとても評判がよかった。馬車があっちこっちと電光のように飛び回って、みんなが素晴らしいと言っていて、私もそう思った。

私はタイラー先生の森に座って、汽車が出て行くのを見ていた。それから、誰かが私を見つけて、何をしているのかと聞かれても何だから、走って家に戻った。ホランド先生が当地に来ておられて、私たちをご訪問された。とても愉快そうにされていて、兄さんのことを尋ねられて、ヴィニーと私がスプリングフィールドのホランド先生のお宅を訪問していいかどうか、母さんに聞いてくださった。

先週はとても暑くて乾燥していたけれど、素晴らしい週だった。私もとても幸せだった。と言うのも、私たちはスージーの家に行ったし、いいえスージーの方がほとんどずっと私たちのところに来ていたのよ。彼女がいると、みんな楽しい。ヴィニーは今スージーのところに行っています。

兄さん、噂は今はずべておさまっています。今何にも聞いていません。スージーは今、何にも気にしていないし、全く気にも留めてないと言って、いる。それは低級で、どんなに無理してやってみても、私たちの天国までは届かないわ。

私、ボードンさんには気をつける。

昨日フォードさんが、教会で私たちと一緒に座られて、昨晚家にお茶を飲みいらした。あの人ったら、おしゃべりの気どり屋さんだと思うわ。

ジョエルさんが来た。「わが好みたる小父貴さま」。私たちはみんなして、よく森に出かけます。昨日の朝、父さんと母さんは一緒にそこまで散歩された。

みんなそちらの方に住むのだと思う。父はそう考えているみたい。

みんなからも宜しくって。

エミリ

[評釈] 1853年6月9日の朝の汽車で、ニューロンドンから325人の人たちを乗せて汽車は到着した。昼にアルヴィン・ハウ夫人のもてなしで、アマースト・ハウスで午餐会があり、エドワード・ディキンソンが出迎えた。当日、州会議員で町と大学の有力者のエドワードが、そうした客人を持ってなして、町を上げての歓迎会があり、行列が町を練り歩くお祭りになったということ、遠くのオースティンに知らせている。

同時にオースティンの恋人 Susan Gilbert が、今はディキンソン家に受け入れられて、同い年のエミリと仲が大変いいことが兄に伝えられている。

4. 従姉妹の Francis と Louise Norcross への手紙

[L245. 1861.12.31 30歳]

……ルー、あなたの手紙には驚かなかった。私はみぞれを眼から払いのけて、ちゃんと読んだかしらと、もう一度手紙を読みます。それからまた母のガウンの縁縫いの仕事に戻ります。あなたが来てくれないとなると、縁縫いの仕事のスピードは高まるわ。だって私の指は他にすることがないのですからね。……奇妙なことに、そんなにも多く「いいえ」と言う私は、他の人から断られるのには耐えられないのよ。また奇妙なことに、多くの人たちから逃げている私だと言うのに、私から人が逃げていくことには耐えられないのよ。ルーちゃん、いつでもいいからいらっしゃい。ここでは心は決して閉じることがないですからね。5月だったかしらね。4月の隣の月かしら。それは撫子の月かしら。

アダムズさんの奥様は、今日息子さんが亡くなったという知らせを受け取りました。アナポリスでの怪我が元でね。フレイザー・スターンさんから電報がありました。フレイザーさんのことは知っているわよね。アダムズさんの奥様の、もう一人の息子さんは10月に露営地で、罹った熱病のため亡くなりました。奥様はそれ以来ベッドから身を起こすことができません。「新年お

めでとう」の言葉は、そのような人の家の門戸をそっと通り過ぎます。「亡くなったのよ！二人の息子さんとも！一人は東部の海岸の近くで撃たれ、もう一人は西部の海辺の近くで撃たれた」……キリスト様、ご慈悲を！ フレイザー・スターンさんは今、アナポリスを離れようとされています。お父さまが、今日会うために行かれました。あの紅顔が凍りついて戻らなければいいがと思います。可哀想に、アダムズ未亡人の息子さんは今夜、狂った風に乗って、村の墓場へ戻ります。そこで彼は眠りを夢見る。夢のない眠り！

この前の月曜日に送った手紙を受け取りましたか。返事が来ないので心配しています。先週の土曜日にも切り抜きを送ったのよ。ルー、私にとってあなたは大事なのよ。私はあなたを他の誰よりも涙で留めておきたい。風邪はどうなったの。お医者様は何って言っているのかしら。あなたを失ってはならないのよ。あなたを暖かくする毛布を送ろうかな。あざみの毛布やなんかを。

クリスマスおめでとう。そしてあなたとファニーとお父様に新年おめでとう。

エミリ

ファニーからのお便り拝受。返事はすぐ書きます。

私たちはファニーを心で包んでしっかり暖かくしてやりましょう。

[評釈] 南北戦争のときに、アマーストからも義勇軍が募られて、特にアマースト大学では義勇軍への志願が多かった。大学の学長の息子 Frazer Stearns もその一人だった。

初期の戦いで、アダムズ夫人の二人の子供が次々に死んで、アダムズ夫人は床についたこと、それに、アナポリスから、さらに南に進軍するにおよんで、学長のスターンズが、息子の身を案じて、兵営に会いに出かけたことが記されていて、その無事が案じられている。

だが不幸にも、Frazer Stearns は、その後3ヶ月も経たないうちに、戦闘死したのであった。次がそのことを、従妹たちに伝える手紙。

[L255. 1862. late March 31歳]

親愛なる従妹のあなたたちへ、

あなたたちは私のためにいろいろと尽くしてくれましたね。今せいぜい私にできることは、勇敢なフレイザーが「ニューバーンで殺された」と伝えることばかりです。あの人の偉大な心臓は「小さな弾丸」に撃たれてしまったのです。

私は弾丸のことについては、聞いてもいましたが、あのフレイザーが弾丸に当たってエデンへ行くとは、思いも寄らないことでした。あの人は軍帽を被り銃剣を帯びて、倒れたそのままの姿でアマーストの街を、馬車に乗って運ばれて行き、あの人の細面の顔を守るようにして、級友たちが右と左に随き従いました。あの人は上官のクラーク教授の脇で倒れ、兵士の腕の中で10分ほど生きていて、2度水を求め、ただ「おお神様！」と呟き息絶えたとか。級友のサンダースンさんが、夜のうちに木板で棺桶を作り、勇敢だった青年を納めて毛布を掛けて6マイルを漕いで、船に乗せました。このようにして可哀想にフレイザーさんは帰って来ました。クラーク大佐は自分の愛弟子を失って、子供のように号泣され、そして自分の任に戻ることがおできにならなかったそうです。お二人はお互いにこの上もなく敬愛しあっておられました。当地ではフレイザーさんのお父様ですら、拝顔することができませんでした。お医者様たちが許可されなかったのです。

フレイザーさんが帰って来たとき、その寝台は大きな棺の中に納められていて、頭から爪先まで綺麗な花で覆われていました。あの人は村の教会を通過して、眠りにつきました。群衆があの人にお休みを言うためにやって来て、合唱隊が歌を歌い、牧師さんたちは彼がいかに勇敢であったかと、若い兵士の心中を語りました。そしてご家族の方々は、風になびく葦のように頭を垂

れられました。

このようにしてフレイザーさんについて、私たちは自分たちの役割を果たしました。でも、あなたは今度の夏にここに来るのですよ。そしたらこの若い十字軍兵士のことを思い出しましょう。勇敢で死ぬことすらも恐れなかった、あの人のことを。あの人の好きだった曲を演奏しましょう。恐らくあの人も聞いて下さることでしょう。失意のエラさんを慰めましょう。牧師さまのおっしゃるには、エラさんは「あの方にことのほかの信頼をお寄せだった」のですから。……

オースティンは徹底的に打ちのめされています。お互いにもっと愛おしみあいましょう。それが私たち残された者ができるせめてものことだから。

愛を、

エミリより

[註] アマースト大学の Stearns 学長の息子の Frazer Stearns は1862年3月14日、ノース・カロライナ州 Newbern での戦闘中、弾丸に当たって死亡した。クラーク教授とは、他ならぬ「大志を抱け」の言葉を残した、後年札幌農学校の校長として招かれたクラーク先生 (William Smith Clark, 1826-86) その人であった。当時はアマースト大学の化学・植物学の教授。南北戦争終了後、当時創設された Amherst Agriculture School (現在の University of Massachusetts, Amherst の前身) の校長を務めた。その後、1877年8月来日。78年5月離日。フレイザーの葬式はアマーストの町の行事として、3月22日に挙行された。

[L414. 1874. 43歳]

あなたたちは私のことを忘れていくかも知れないですね。私は自分のことすら思い出せないくらいだから。私は気丈にできていると思っていたけれど、この強さがかえって私の足元をすくいました。

6月15日のこと、私たちが夕食をしていたところに、オースティンが入って来ました。手に電報を持っていて、その顔を見た瞬間、なぜか取り返しのつかないことが起こったという感じがしました。オースティンは父様の容態が極めて悪い、だから自分とヴィニーは早速出かけなければならないと言いました。汽車は出てしまっていました。それで馬車の準備をしているうちに、お父様死去の知らせが届きました。

父は今、私たちのところに住んでおられなくて、新しい家に住んでおられる。一時間のうちに倉皇として建てられた家ですが、この地上の家よりも素晴らしい家です。

お父様はこちらに庭を造られてから移って行かれたので、向こうにはお庭を持っておられない。だから、私たちはお父様に一番綺麗なお花を持って行くつもりです。お父様がそれを分かって下さると思えば、私たちも泣き止むことができる。

もうこれ以上は書けません。幾晩も過ぎたのに、私の心はいまだに落ち着きません。気づかなかったけれど愛情のこと有り難う。お父様にお聞かせした最後の曲の中に次のような一節があったわ。

「愛する仕事を止めて、しばし憩え」

エミリ

[評釈] エドワード・ディキンソンは、1874年6月15日マサチューセッツ州議会で演説中に倒れ、ホテルに連れて行かれたが、その夜半過ぎに死去した。最後の一節とはジェイムズ・モンゴメリーの賛美歌からの一節。

神の僕よ、よくぞ戦った！
愛する仕事を止めて、しばし憩え。
戦いは終わり、勝利は得られた。
汝の主の喜びの中に入りなさい。

[L610. 1879. Early July 48歳]

親愛なる従妹たち、

当地で火事があったことご存じですか。風向き次第ではオースティンもヴィニーもエミリもみんな焼け出されかかったのです。でも恐らくリパブリカン紙でその記事を見たことでしょうね。

私たちは半鐘の音で眼を覚まさせられました。アマーストでは火事るとき消防夫に伝えるために、半鐘をつくののです。

私は窓に飛びつきました。そしたらどっちの方のカーテンからも、あの恐ろしい太陽が見えたってわけ。そのとき月は高いところで輝いていたし、鳥たちはトランペットを鳴らすかのように鳴き騒いでいました。

ヴィニーが毒蛇のように、そっとやって来て「エミリ、恐がらなくてもいいわ。7月4日のお祭りだわよ」と言いました。私は、火事が見えるわと言いませんでした。というのもヴィニーが私のことを騙していた方がいいと思っているのなら、騙された振りをするのが一番だと思ったのです。ヴィニーは私の手を取って、母が寝ている部屋へ連れて行きました。母は眼を覚ましておらず、マギーがその脇に座っていました。ヴィニーがちょっとの間、席を外したので、マギーの耳元で「火事はどうなっているの」と聞きました。

「エミリさん、ただステッピンさんの納屋だけだよ」

でも私は、村の右手も左手もステッピンさんの納屋とは眼と鼻の先だと知っていました。建物が燃え落ちる音や、油が爆発する音、声高に話しながら町の人たちが歩いているのが聞こえました。私たちの地区が焼けているのに、それを知らなげな地区の方から大砲の音が、ビロードのような柔らかな音で砲声を立てているのが聞こえて来ました。

明け方だというのに煌々として真昼よりも明るかったので、向こうの下の果樹園の葉っぱの上で芋虫が這っているのが見えたぐらい。それでもヴィニーは、けなげにも「7月4日だってば」と言い続けました。

.....

ヴィニーが「ただの7月4日よ」と言っていたのをいつも思い出すことでしょう。きっとヴィニーは私たちが死ぬときでも、恐がらないように似たようなことを言うのでしょう。

フットライトがあればお墓が見栄えが良いということはなく、ただ不滅があればこそです。

個人的なことばかりを書いてごめんなさい。でも私たちの災難は、あなたたちのそれでもあると知っていますし、またそのように思っているものだから。

お二人のそれぞれに愛を送ります。

エミリ

[評釈] 父の死後、召使いの Maggie Maher の助けを得ながら、母と妹と、女3人して生きていて、町に火事があったときに、万事を取り仕切った気丈で元気な妹の Lavinia (Vinnie) が、エミリを動転させないように、あれは火事ではなく7月4日の独立記念日のお祭り騒ぎであると騙すこと、それを騙された振りをしているエミリ、母の介護をしている Maggie、周囲の騒ぎをよそにぐっすり寝込んでいる病臥中の母など、ディキンソン家の当時の人間関係が如実に分かる手紙である。火事、葬式というようなことは、平穏な町にとっては一大事件であったものと思われる。

[L785. 1882. Late November 51歳]

親愛な従妹のお二人へ、

もっと早くお便りしたかったけれど、でも母の死が私の気持ちをすっかり動転させていたのです。お悔やみにも少しはご返事を出しましたが、でもほとんど型通りのものでした。母はあなたたちが伯母さんとして知っている姿とは違っていました。結局、苦痛という大きな使命は公認されて、度重なる悲しみによって優しさにまで達していました。母がもしずっと前に亡くなっ

ていたとしたら、これほどまでの偉大さを持っていなかったことでしょう。別れの儀式みたいなものではありませんでした。風に吹かれた雪片のようにして、私たちの指の間から擦り抜けて行って、今は「永遠性」というそよ風の一部となりました。

沢山の人たちが慰めて下さいますが、彼女の魂が今どこにあるか分かりません。

私たちはきっと神様によって慈しまれるのでしょう。この素晴らしい大地を造られた御方は、自分が造られた者たちをさらに驚嘆させる力を持っておられるはずです。その向こうはすべてが沈黙。

お母さんの死に顔はとても美しかったです。天使たちは厳粛な芸術家です。ただ一度だけ訪れる輝きがお顔に灯りました。お墓に横たえると、あたかも絵を隠すといった感じでした。でも父を受け入れた草は、この来客を満足させることでしょう。結婚式の祭壇の前で、自分のところを再び訪れてくれることを一生望んでいた人を。

永遠性がどのようなものか言うことはできません。それは海のように私の周りを取り巻きます。

私のことを思い出してくれて有り難う。思い出すとは、力に満ちた言葉ですね。

「汝はこの天地が出来たときから、それを私に賜ったのだ。」

[評釈] 母の死(1882.11.14、享年51歳)の様子について、従姉妹に伝えている。母と従姉妹の母とは、Norcross 家の姉妹であったので、従姉妹から見れば叔母にあたる。その人の死と葬式の様を伝える手紙で、厳粛かつ美しい文章で、ディキンソンの手紙が時に一遍の詩であることの一例とすることができよう。

[L1046. 1886. 5 55歳]

愛しい従妹たちへ、
召されて行きます。

エミリ

[評釈] 1885年1月の手紙で、エミリは Hugh Conway 作の *Called Back* を読んだと記している。5月の第2週にこれ以上もう生命が持たないと思ったのであろう。1886年5月初のこの手紙は、ディキンソンの最期の手紙となった。5月13日ディキンソンは意識を失い、その後意識を回復することなく5月15日の夕刻、息を引き取った。

自分の死期を確実に悟り、そのことを最も親しかった身内の従妹たちに手紙で予告して逝去するという、詩人としては見事な死に方であったと言えよう。死期の近いことを悟ったときに、若い少年時代の頃の楽しい思い出話を、小説『自動車泥棒』(*The Reivers*, 1962) に仕上げ、その発刊とほぼ前後して世を去ったフォークナーの死に方と似て、自分の過去の文業全体に、冠石を置いた見事な画竜点睛の行為と言えよう。今日、アマーストのディキンソンの墓石には“Born Dec. 10, 1930/**Called back** May. 15, 1886” (強調は筆者) とのみ刻まれている。

Selected Bibliography

Primary Sources

The Letters of Emily Dickinson. 3 vols. Ed. Thomas Johnson. Cambridge: The Belknap Press of Harvard University Press. 1986.

The Poems of Emily Dickinson. 3 vols. Ed. Thomas Johnson. Cambridge: The Belknap Press of Harvard University Press. 1979.

Secondary Sources

Habegger, Alfred. *My Wars Are Laid Away in Books: The Life of Emily Dickinson*. New York: Random House, 2001.

Higgins, David. *Portrait of Emily Dickinson: The Poet and Her Prose*. New

ディキンソンの手紙(3) 身内と友人たちへの手紙

- Brunswick, N. J.: Rutgers University Press, 1967.
- Johnson, Thomas. *Emily Dickinson: An Interpretative Biography*. Cambridge: Belknap Press of Harvard University Press, 1955.
- Leyda, Jay. *The Years and Hours of Emily Dickinson*. 2 vols. New Haven: Yale University Press, 1960.
- Liebling, Jerome, Christopher Benfey, Polly Longworth and Barton St. Armand. *The Dickinsons of Amherst*. Hanover: UP of New England, 2001.
- Sewall, Richard. *The Life of Emily Dickinson*. New York: Farrar, Straus and Giroux, 1980.
- St. Armand, Baton Levi. *Emily Dickinson and Her Culture: The Soul's Society*. London: Cambridge University Press, 1984.
- Todd, Mabel Loomis. *Letters of Emily Dickinson*. New York: Grosset & Dunlop, 1962.
- Wolff, Cynthia Griffin. *Emily Dickinson*. New York: Addison-Wesley Publishing Company, Inc. 1988.
- 山川瑞明・武田雅子『エミリー・ディキンソンの手紙』東京 弓書房 1988年。